

## 江藤 淳の業績について

### 「夏目漱石論」

第一にそれは、夏目漱石という作家を文壇的・社会図の網目から、また文芸思潮史という図式ばった観察から解放し、明治末期を代表する一知識人として、時代の一般的空気の中に置き直して燃せたことである。言い換えれば漱石を文壇人としてではなく、一市民として捉えてみせたことである。文壇史的・地図から解放したということは、多くの門弟に取り囲まれた漱石山房の木曜会の主人としての漱石すらをも重視はしないということである。私人・家庭人としての、また市民としての漱石、しかも高い知性と倫理性の故に、最も身近くは己れの家族に、遠くは社会とそして国家とに強い責任感を持ち、自我と他者、個人と全体、といったおよそ倫理の基本的問題についての深い思索を、つねに意識から放つことなく生きていたのである。そうした真剣な生活人としての漱石像がそこにあった。漱石が真に国民作家の名に値する、広くて根強い、永続する大衆的人気を獲得した秘密は、この辺にあったではなかろうか。読書大衆の眼は案外に鋭く、かつ公平である。読者は、漱石の全作品を貫いて流れているものが高慢な芸術家の自己主張でもなく、悟達をめざして苦闘する求道者の悲願でもない。自分たちがそれによって生きているのと同じ平凡な日常生活の倫理であることを鋭敏に嗅ぎ取っていた。漱石の魅力が小説の巧いか拙いかなどには関係のない、生活者の倫理という平凡だが永遠に困難な問題と正面から取り組んで見せた点にあるということ、その作品につねに付きまとっている何かしら暗い翳のうちには、己れ一個の自我の伸長のために悩む強くおごれる精神ではなく、日常茶飯の場における他者への配慮の故に常に自らが傷つく優しい魂がひそんでいたのだということ、こうした重大な事実を、江藤氏は明晰に指摘して見せた。

それはまた見たところ権威として確立しているかに見える文学史上の定説というものが意外に頼りないものであり、権威とされているが故に盲信してかかたりしてはならぬものだということも教えている。江藤氏が（漱石についてはもうすべてがいろいろとされている）といった通俗の見方を不可解とし、果敢にこの状況に挑戦したのは漱石の死後 40 年を経たのちのことであった。それは戦前に確立されていた各種の価値に対する、戦後世代の手による根底からの尖鋭な批判と再検討の動きがこれを機会に明らかに表に出始めた。それは「戦後派」的な反抗のための反抗ではなく、日本近代史に対する真の公平な解釈は我々から始まる、といったような意気軒昂たる、若々しい精神の動きが台頭してきたのである。

さらにもう一つ、これは江藤氏固有の特色というわけではないが、それは氏が自らが批評の対象に選んだ作家と作品とに、実に真剣に全面的に対決し、格闘している氏の態度は「作家と批評」の部分に明快に言及されているが、氏は実証主義的作家研究の安全で衛生的な枠内に留まる事を欲しなかったし、また作家をその個人的な運命の一回性を無視して文学史の座標軸の然るべき空いた場所に位置付け、その存在を「説明」してしまう無神経にも強く反発する。そうかといって取り上げた作家を材料にして、一見その作家をして語

らしめるがごとくにして実は自分の勝手な歴史観や人生観を喋りまくる、といった評論を展開するのは、氏の漱石に対する敬愛と親炙の度合いは切実過ぎたのであろう。

かくして江藤氏の最初の漱石論は作品研究でなく文学史的研究でなく、また第二、第三の新しい漱石神話の創作でもない、それは漱石という一個の代表的人間に就いての深い思索の果実となり、それまでまだ誰の眼にもこう映らなかつたという新しい漱石像を提示しえたのであり、それによって氏が目指した「創造的批評」を成就しえたのだった。

江藤氏の漱石研究はその後も二十余年にわたり、なお倦くことなくつづけられていた。

## 「漱石とその時代」（新潮選書）刊行推移

### 第一部 1970. 08. 20 刊行

慶応3年(1867)1月5日の生誕から、明治33年夏の五高教授時代まで

### 第二部 1970. 08. 31 刊行

明治33年(1900)10月ロンドンへの留学直前から、明治37年「吾輩は猫である」執筆まで

### 第三部 1993. 10. 23 刊行

明治38年1月「吾輩は猫である」の発表から、明治40年文化大学講師を辞任して東京朝日新聞に入社するまで

### 第四部 1996. 10. 26 刊行

明治40年3月東京朝日新聞の小説記者となつてから、明治天皇崩御による明治の終焉まで 「虞美人草」「三四郎」「それから」「門」等

### 第五部 1999. 12. 20 刊行

大正元年の「行人」から「こころ」「道草」の晩年まで

江藤淳は、24歳の若さで最初の「夏目漱石」論を上梓したあと14年を経て、1970年に「漱石とその時代」第1部、第2部を刊行し、その後また時を空けて、1993年に第3部、1996年に第4部、そして1999年自裁後に第5部が未完として出版された。実に総頁数の1914に及ぶ大作であり、江藤淳はこの著作により菊池寛賞と野間文芸賞を受賞している。

江藤淳は文芸評論家ですが、一方明治時代の政治、人物等に関する著作も多い。この二つの要素が上手くかみ合つて、正に題名「漱石とその時代」が物語るように、漱石の生き様及び作品の評論とその時代の動きが並列的に述べられている。

つまり、読者は漱石の人物、作品を理解すると共に、明治という時代の流れをも、くみ

取ることが出来る。漱石の作品よりも、漱石自身の人生を知ることが、より興味をそそります。特に、朝日新聞のいわゆる小説記者になってからの生活を見ることにより、漱石は正しく生誕から死に至るまで苦悩の時間を過ごしたことがありありと分かり、胸を打たれる。

#### 「 漱石とその時代 」梗概

**第一・二部**では、江藤氏は、執筆にあたり、「それはいわば漱石という人間と明治という時代との相互交渉をたどる仕事」とかたり、「作家の仕事は時代を超え得るが、どんな作家も昨日までの過去を背負い、明日何が起こるかを予知できない一人の人間として、日々を生きなければならない。そして、それにもかかわらず、彼は時代というカンヴァスの上にしか彼の生涯の軌跡を描くことができない、漱石の軌跡を追いながら、このことを改めて痛感し得なかった」と、「考えてみれば我々もまたそのように生きており、そのようにしか生きられないのである」と。(あとがき)

江藤氏がこの評伝の中に描き出したものは、単に漱石＝個人の伝記ではなく、明治初期における知識人の闘争と葛藤なのであろう。

病んで死にいたる、正岡子規、高山樗牛などの若く傷ついた心、漱石のように家庭と生活と現実とに苦しめられ、精神的窮地に追い込まれた先覚者たちの姿、そして明治の文学勃興を語ること、それこそが漱石の生きた時代、事実と触れることになるのかも知れない。

漱石を再び読み、その表面に隠された漱石の傷跡に指を這わせてみたい衝動にかられる。幼少の頃養子に出された先で夫婦の争いにまきこまれた寂寥感、実家に引き取られた後の孤独感、ひとりて世に立つ重圧感、妻を娶り家庭をもって教壇にたつ自立感。英国留学中における、英文学に対する絶望感。それは人生の目的を根底から崩し、自分の生活をも崩壊させる。異国にあって、周囲との違和感を知り、重圧にさらされ続ける緊張感。

一個の人間が、これほどまでに多様な苦しみを課せられるのかと、信じ難い思いにかられる。その一方、正岡子規もまた、彼を襲った絶望的な病に苦しめ続けられるという事実を受け入れなければならなかった。

まさに、“漱石とその時代”であって、その時代の側面でした。

明治 38 年 1 月、「吾輩は猫である」で一躍文名を上げた漱石は、日露戦争から戦後にかけて、驚くべき多彩な作家的才能を示しつつ、この間に血縁と親族のしがらみは、いつしか“捨てられた子”である漱石の身边を脅かしはじめた。**第三部**は、こうして文科大学講師夏目金之助がついに転職を決意するに至り、東京朝日新聞記者夏目漱石となっていくいきさつを、内と外から跡付けている。「猫」から「坊ちゃん」「草枕」、そして大学講

師を退職して東京朝日新聞への入社、漱石が作家として成り立つ過程を描いた部分です。

そして、面白さを感じるのは、やはり夏目漱石の人柄が持つ面白さ、漱石の育つ過程と成人した後への影響という点にあります。興味尽きない問題点がそこにあるのでしょう。

ここでは、養父・塩原昌之助との問題が生じてきます。

夏目家が塩原家から金之助(漱石)の籍を抜くにあたり、昌之助は夏目家に断らないまま金之助から「互いに不実不人情に相成らざる様致候」という旨の念書を差し入れさせていた。

「草枕」の冒頭で、人の世の住みにくさを漱石は訴えていると言います。漱石は、断然“人の世”の壁外に去るのみだと、心を固めていたのかもしれない。

また、漱石の朝日新聞への入社を決める際の条件闘争は、極めて興味深いものがあります。それだけ漱石の立場は孤独で自分一人が頼り、という思いが強かったためだと思われるます。

入社の条件等を問い合わせる手紙を読むと、漱石が大学を辞める覚悟を固めるにあたり、何より収入とその将来的な地位の安全を心配していたことが判ります。作家としての自信などは、まだ確固たる状況ではなかったのでしょう。

**第四部**に描かれた漱石は、明治40年3月、文科大学講師を辞任し、東京朝日新聞に入社し、小説記者になった漱石である。そのため「虞美人草」以後の作品は、すべて「朝日」の小説記事として書かれている。文名が挙がるにつれ、養父塩原昌之助が彼の前に出現し、養育料を請求する事件が起こり、心身の消耗はついに修善寺の大患となるが、辛くも蘇生したとき、彼を育てた明治という時代の終焉を迎えることとなった。漱石の言葉が「全集」によって超時間化された抽象的な空間から呼び戻され、時代の文脈の只中に甦らせようとしている。明治末期の5年間を叙している。

東京朝日新聞社の小説記者となりながら、思うように作品の執筆が進まない漱石の苦しさを**第五部**は始まります。

とくに「行人」には苦しんだようで、途中で新聞連載を休止して、その後にもまた再開したりしています。朝日新聞社入社後を描いた第四部は、「虞美人草」「三四郎」「それから」「門」等の立て続けの創作、養父・塩原昌之助の出現、修善寺の大患と、いろいろな出来事があったが、この第五部では漱石にかなりの**鬱り**が感じられます。

作品的には、「こころ」「硝子戸の中」「道草」が書かれた時期ですが、漱石の胃潰瘍も進み、執筆にかなり苦しんでいる様子、朝日新聞側の漱石に対する評価も低下しているようです。

いよいよ漱石の最後の部分へ、という直前で中断してしまったという観があり、本当に残念に思えます。